

公立小学校における「英会話活動」に関する意識調査

——小学校英語活動指導者講座参加者に対するアンケート調査をとおして——

北條 礼子*・松崎 邦守**

(平成15年10月31日受付；平成15年12月18日受理)

要 旨

本研究は、公立小学校教諭の小学校英語に対する意識を明らかにすることである。2003年6月にN県小学校英語活動指導者講座に参加した公立小学校教諭32名を対象に、5段階尺度形式のアンケートを実施した。調査の結果、問題点として強く意識されていたのは、時間確保の難しさ、クラス人数が多すぎること、英語を担当する教員（日本人の英語専科教員、ALT）が少ないこと、カリキュラム・教材を作る時間やノウハウの不足、すぐに使える教材の不足であり、小学校で英語活動を実施する際に小学校教員が直面している大変現実的な問題であった。また、研修希望内容としては日本の文化に関する知識と臨界期仮説や第二言語習得に関する理論が研修内容としての必要性が、他の項目内容に比べて、どちらかというとき低く捉えられていることがわかった。また、研修希望内容として希望の強いものは、チャンツの活用法、英語のゲームの進め方、英会話活動を進めるのに必要なClassroom Englishであることが明らかになった。

KEY WORDS

English at elementary schools	小学校英語	English activities	英語活動
in-service training	教員研修	survey	調査研究

1. 研究の背景

平成14（2002）年4月から現学習指導要領が正式に実施され、「英会話活動」に取り組む公立小学校が今後増加の傾向をたどるものと予想される。「平成14年度自治体調査」によると、全国の全公立小学校22,847校中、第3学年から第6学年まで、過半数以上の小学校が「英会話活動」を実施している。実際の数字をみると、小学校3年生では全体の51.3%にあたる11,724校、小学校4年生では全体の52.3%にあたる11,957校、小学校5年生では全体の53.6%にあたる12,327校、小学校6年生では全体の56.1%にあたる12,806校が「英会話活動」を実施していることが報告されている。また「英会話活動」の年間時数をみると、年間1時間から11時間実施している公立小学校が63.0%（8,072校）となっている。つまり、全国の公立小学校の過半数が「英会話活動」を取り入れているが、その頻度は1か月に1回以下であり、ほとんどの公立小学校がいわば手探りの状態で「英会話活動」を実施し始めているのが現状であるといえよう。さらに、文部科学省は平成12年度より小学校における英語の教科化を念頭に研究開発学校の指定を開始し、平成15年度は、1年目から3年目までの指定を含み9件が指定を受けてい

* 学習臨床講座

** 千葉県沼南町立高柳中学校

る。

このような状況の下、独立行政法人教員研修センターは全国規模の研修として平成13年度より小学校教員の英語活動研修講座を開催している。平成15年度には、各都道府県における小学校の英語活動を担当する教員のリーダーとなる教員700名を対象として4～5日間の研修を実施している。しかし、平成15年度の全国の小学校教員数がおおよそ400,000名であること、および同じく同センター主催の中・高英語科教員を対象とした研修が1000名の英語教員を対象とし19日間実施されていることなどと比較すると、参加可能な教員数ならびに実施日数から考えてみても不足感が否めないところであろう。

また、各都道府県レベルでの小学校教員に対する英語活動研修に視点を転じると、各県により扱いが異なっている。しかし、日数的には1～3日程度の実施がほとんどであり、公立小学校における英語活動の将来を模索しながら、各都道府県レベルでもとりあえず研修を始めなければならないという程度の実施であることが見て取れる。また、同研修の担当者が中・高の英語科の指導主事が兼担している例が多くみられ、小学校英語を専門とする担当者不在のまま急場をしのいでいる状況が見られる。したがって、研修内容面でも現場で実践に携わる小学校教員のニーズが的確に反映されているとは言い難いのが現状となっている。

ところで、小学校の英語教育に関するわが国の主な文献を概観すると、同教育の指導者に望まれる資質や必要な研修内容についていくつかの指摘がなされている（渡辺, 2001; 伊藤, 2000）。

小学校英語の指導者の資質についてみると、渡辺（2001）は、小学校英語の指導者には次の5つの資質が必要である、と述べている。その5つとは以下のとおりである。

①小学校英語教育の役割を理解していること

②英語の使い方のコツを心得ていること

例：絵、写真、実物、ジェスチャーなどを使いながら英語を話すこと

長い文は避け、できるだけ単純な単語を使うこと

大切なメッセージは繰り返し語りかけること

③国際理解教育の本質が分かっていること

④想像力が豊かであること

⑤指導者の個性や人間性に関する資質として：

- ・授業を楽しくできる、良い意味のエンターテイナーである人
- ・授業の中で個性が自由に発揮できる人
- ・子ども中心の授業ができる人
- ・異文化素材の掘り起こしと、その教材化ができる人
- ・外国人や異文化との交流や接触に関心の高い人

渡辺（2001）は、さらに指導者の養成と研修について、英語力アップと教育方法についての研修が必要であることを指摘している。そして後者の研修場所として、JASTEC（日本児童英語教育学会あるいはJES（小学校英語教育学会）などの研究会をあげている。一方、伊藤（2000）は、学級担任に必要な研修内容として3点あげている。その3点とは①英会話、②教材・教具に関すること、③指導技術を身につけることである。さらに指導者の養成について、教員養成大学、大学院大学、専門学校が研修や資格取得の機会を提供する必要がある、同時に行政機関の協力・援助が必要である、と付け加えている。以上の指摘は、あるべき姿として至

極当然の資質および研修内容ではあるが、現実の研修においてすべてを実現することになるとたいへんな困難さが伴うことが容易に予想される。

今後、都道府県あるいは市町村教員会レベルで、現職小学校教員に対する小学校英語活動に関する効果的な研修カリキュラムを考案していくとするならば、実際に実践に携わっている小学校教員が現在行われている小学校英語活動に対してどのような問題点を抱えているのか、またそれらを解決するための研修としてどのような内容を望んでいるのかなどについて意識調査などにより明らかにしていくことがまず先決であると考えられる。

2. 研究の目的

本研究の第一の目的は、「小学校英会話活動」に関する問題点についてN県小学校英語活動指導者講座参加者の意識を明らかにすることである。

本研究の第二の目的は、「小学校英会話活動」の研修内容に関するN県小学校英語活動指導者講座参加者のニーズを明らかにすることである。

3. 研究の方法

3.1 対象者：N県小学校英語活動指導者講座参加者32名（回答数33のうちの有効回答数）

3.2 測定具：フェースシートと41項目から成る5段階尺度形式のアンケート

内訳は「英会話活動」の問題点に関する19項目、小学校英語の研修希望内容に関する22項目の計41項目である。

3.3 実施時期：2003年6月

3.4 手続き：無記名式集団調査で約10分間で実施した。

3.5 分析方法：直接確率計算、 χ^2 検定、分散分析

4. 研究の結果と考察

4.1 フェースシートについて

N県小学校英語活動指導者講座参加者32名に対して中学校あるいは高等学校英語科の免許を持っているかどうかについて回答を求めたところ、持っていると回答した参加者が13名、持っていないと回答した参加者は19名であった。この結果について直接確率計算を行ったところ $p=0.5234$ であり、有意差はみられなかった。

さらに、小学校での英語の教科化について賛成であるかどうかについての回答をみると、賛成が25名、反対が7名であった。この結果についても直接確率計算を行ったところ $p=0.0021$ であり、1%レベルで有意に賛成が多かった。

4.2 「英会話活動」の問題点について

4.2.1 平均、標準偏差より

調査の対象となったN県小学校英語活動指導者講座参加者32名が、公立小学校における英語活動の問題点に関する19項目に対してどのような意識を持っているかについて集計し、平均値および標準偏差を求めたが、その結果は表1に示すとおりである。

表1をみると、5つの項目が平均4.0を越えていた。平均値が高い順にみると、項目12「教材を作る時間をなかなか確保できない（平均：4.63）」、項目3「英語を専門教科とする小学校の日本人教師が少ない（平均：4.50）」、項目10「カリキュラムを作る時間をなかなか確保でき

ない（平均：4.41）」、項目8「チーム・ティーチングを行うALT（外国人講師）の人数が少ない（平均：4.34）」、項目1「総合的な学習の時間で実施されるため、他のテーマとの兼ね合いで十分な時間確保が難しい（平均：4.00）」であった。以上、平均値からみると、本研究の対象者は小学校英語活動の問題点として、教材やカリキュラムを作る時間の確保や英語活動のための時間そのものの確保が難しいこと、小学校英語を担当する教員（ALT、英語専門の日本人教師）の不足を強く意識していると考えられる。

表1：小学校英語活動の問題点の平均、標準偏差（N=32）

番号	項目内容	平均	SD
1	総合的な学習の時間の枠内では十分な時間確保が難しい	4.00	0.92
2	現在のクラスの人数では多すぎる	3.56	1.46
3	英語を専門教科とする小学校の日本人教師が少ない	4.50	0.67
4	小学校では英語よりも国語をしっかりやるべきである	2.84	1.05
5	小学校から英語嫌いを作ってしまう	1.63	0.75
6	中学校からでも十分英語力はつくので、小学校からでは早すぎる	1.38	0.55
7	身近な内容であっても、小学生にとって英会話は難しすぎる	1.50	0.57
8	チーム・ティーチングを行うALT（外国人講師）の人数が少ない	4.34	1.00
9	現在行われている「英会話」活動は、遊びと学びとの区別がつかない	2.38	1.13
10	カリキュラムを作る時間をなかなか確保できない	4.41	0.56
11	カリキュラムを作るノウハウが少ない	3.94	0.88
12	教材を作る時間をなかなか確保できない	4.63	0.55
13	教材を作るノウハウが少ない	3.63	0.83
14	すぐに使える教材が少ない	3.53	1.05
15	児童の学校生活にゆとりがなくなってしまう	2.25	1.16
16	教師のゆとりがなくなってしまう	3.13	1.29
17	受験戦争が激化したり、塾通いが加熱する恐れがある	2.34	1.10
18	「学び方を学ぶ」という総合的な学習の時間の趣旨を生かすことは難しい	3.16	1.08
19	「生き方を学ぶ」という総合的な学習の時間の趣旨を生かすことは難しい	2.75	1.11

また平均が2.0を越えない項目も3項目みられたが、平均値が低い順にみると、項目6「中学校からでも十分英語力はつくので、小学校からでは早すぎる（平均：1.38）」、項目7「身近な内容であっても、小学生にとって英会話は難しすぎる（平均：1.50）」、項目5「小学校から英語嫌いを作ってしまう（平均：1.68）」であった。以上の3項目は、小学校の英語活動に対する反対意見として一般的な考えであるが、本研究の対象者は同3項目に対して否定的に捉えていることがうかがえる。

4.2.2 χ^2 検定結果

次に、小学校「英会話活動」の問題点に関する各項目について、さらに細かく検討するため、 χ^2 検定を行った。その際、対象者の考えや意識をより明確にするため、5段階尺度形式の「1：全くそう思わない」「2：どちらかというと思わない」を反対に、また「3：どちらでもない」を中立、さらに「4：どちらかというと思おう」「5：全くそう思う」を賛成とし、3段階にまとめて再集計した上で χ^2 検定を行った。その結果は表2に示すとおりである。

表2：小学校英語活動の問題点各項目の集計結果と χ^2 検定結果 (N=32)

項目	項目内容	平均	集計結果			χ^2 検定結果		
			賛成	中立	反対	χ^2 (2)	p	多重比較(ライアンの名義水準, $p < .05$)
1	総合的な学習の時間の枠内では十分な時間確保が難しい	4.00	25	4	3	28.93	**	賛成>中立≒反対
2	現在のクラスの人数では多すぎる	3.56	22	1	9	21.06	**	賛成>反対>中立
3	英語を専門教科とする小学校の日本人教師が少ない	4.50	29	3	0	47.68	**	賛成>中立≒反対
4	小学校では英語よりも国語をしっかりやるべきである	2.84	7	15	10	3.06	NS	賛成≒中立≒反対
5	小学校から英語嫌いを作ってしまう	1.63	1	2	29	47.31	**	反対>賛成≒中立
6	中学校からで十分なので、小学校からでは早すぎる	1.38	0	1	31	58.18	**	反対>賛成≒中立
7	身近な内容でも小学生にとって英会話は難しすぎる	1.50	0	1	31	58.18	**	反対>賛成≒中立
8	TTを行うALT(外国人講師)の人数が少ない	4.34	27	3	2	37.56	**	賛成>中立≒反対
9	現在の英会話活動は、遊びと学びとの区別がつかない	2.38	6	7	19	9.81	**	反対>賛成≒中立
10	英会話活動のカリキュラムを作る時間がない	4.41	31	1	0	58.18	**	賛成>中立≒反対
11	英会話活動のカリキュラムを作るノウハウが少ない	3.94	23	7	2	22.56	**	賛成>中立≒反対
12	教材を作る時間をなかなか確保できない	4.63	31	1	0	58.18	**	賛成>中立≒反対
13	教材を作るノウハウが少ない	3.63	19	10	3	12.06	**	賛成>反対
14	すぐに使える教材が少ない	3.53	19	7	6	9.81	**	賛成>中立≒反対
15	児童の学校生活にゆとりがなくなる	2.25	5	8	19	10.18	**	反対>賛成
16	教師のゆとりがなくなってしまう	3.13	13	10	9	0.81	NS	賛成≒中立≒反対
17	受験戦争激化、塾通いの加熱が起こる恐れがある	2.34	5	8	19	0.17	NS	賛成≒中立≒反対
18	総合的な学習の時間の趣旨、学び方を学ぶを生かせない	3.16	15	7	10	3.06	NS	賛成≒中立≒反対
19	総合的な学習の時間の趣旨、生き方を学ぶを生かせない	2.75	9	10	13	0.81	NS	賛成≒中立≒反対

** $p < .01$

表2から、まずここであげた19の問題点に対する反応をみると、賛成であるとの反応が得られた項目内容が9項目、反対であるとの反応が得られた項目内容が5項目、賛成でも反対でもないという反応が得られた項目内容が5項目であった。

反対という反応がみられた5項目は、「小学校から英語嫌いを作ってしまう」、「中学校からでも十分英語力はつくので、小学校からでは早すぎる」、「身近な内容であっても、小学生にとって英会話は難しすぎる」、「現在の英会話活動は、遊びと学びとの区別がつかない」、「児童の学校生活にゆとりがなくなる」である。この5項目に共通しているのは、小学校英語は英語嫌いを作らず、時期的にも早すぎず、難度も問題がなく、遊びと学びの区別もあり、児童のゆとりにも影響がないという、小学校英語に対する肯定的な態度であると考えられる。

さらに、賛成、反対、中立という反応がほぼ同等に現れた5つの項目内容をみると、「小学校では英語よりも国語をしっかりやるべきである」、「教師のゆとりがなくなってしまう」、「受験戦争が激化したり、塾通いの加熱が起こる恐れがある」、「総合的な学習の時間の趣旨、学び方を生かせない」、「総合的な学習の時間の趣旨、生き方を学ぶを生かせない」というものであった。以上の5項目の内容は、英語より国語の重要性、受験戦争・塾通いへの影響、総合的な学習の時間との関係、教師のゆとりへの影響、である。英語より国語が重要なわけではないか、あるいは、小学校英語が受験戦争・塾通いを加熱させるのではないかという問題点は、小学校英語に反対の立場に立つ意見としてみられる代表的なものであるが(北條他, 2002b),

本研究の対象者は χ^2 検定の結果からも以上の意見について賛成が多いとはいえないということが明らかとなった。本研究の対象者は、小学校英語教育に対してかなり肯定的であると推察されることから、この結果は納得のいくものであると考えられる。

次に、本調査で取り上げた問題点について賛成であるとの回答が多かった項目内容は「総合的な学習の時間で実施されるため、他のテーマとの兼ね合いで十分な時間確保が難しい」、「現在のクラスの人数では多すぎる」、「英語を専門教科とする小学校の日本人教師が少ない」、「T T (ティーム・ティーチング)を行うALT (外国人講師)の人数が少ない」、「英会話活動のカリキュラムを作る時間をなかなか確保できない」、「英会話活動のカリキュラムを作るノウハウが少ない」、「教材を作る時間をなかなか確保できない」、「教材を作るノウハウが少ない」、「すぐに使える教材が少ない」という9項目である。この9項目の項目内容は、時間確保の難しさ、クラス人数が多すぎること、英語を担当する教員(日本人の英語専科教員、ALT)が少ないこと、カリキュラム・教材を作る時間やノウハウの不足、すぐに使える教材の不足であり、小学校で英語活動を実施する際に小学校教員が直面している大変現実的な問題であると考えられる。したがって、今後、現職小学校教員に対する小学校英語活動に関する研修カリキュラムを考案していく際には、「英会話活動のカリキュラムづくりや教材作成のノウハウ」に関する内容を研修に取り入れていく必要があると考えられる。

4.2.3 分散分析結果

本調査の対象者が以上の19項目の問題点のうち、どの問題点を強くあるいは弱く意識しているのかをさらに明らかにするために、分散分析を行った。その結果、F値は41.77であり、1%レベルで有意な結果となった($F(18,558)=41.77, p<.01$)。さらに、LSD法による多重比較を行ったが、項目5「小学校校から英語嫌いを作ってしまう」、項目7「身近な内容でも小学生にとって英会話は難しすぎる」、項目6「中学校からで十分なので、小学校からでは早すぎる」の項目内容が他の16の項目内容より、有意に意識が低いことがわかった(MSe=0.83, 5%水準)。同結果は、「4.2.1」における平均値からの分析結果を裏づける結果である。本研究の対象者である小学校英語活動指導者講座参加者は、一般の公立小学校教員より小学校英語に対して関心が強いと推測されることから、上記3項目に対して否定的に捉えていることは当然の結果であると考えられる。

4.3 「英会話活動」の研修内容に関する希望について

「英会話活動」の研修内容に関する希望に関する22項目について、N県小学校英語活動指導者講座参加者32名による各項目への回答についてそれぞれ平均値、標準偏差を求めたが、その結果は表3に示すとおりである。

表3をみると、研修希望内容22項目のうち、18項目において平均が4.0以上であった。また、平均が3.0~4.0未満のものは4項目のみであった。したがって、本研究の対象者は、小学校英語活動の研修内容として一般的に考えられている内容に対してたいへん肯定的に捉えていることがわかる。また、ふだんの実践においてすぐに役立つ内容について研修希望を強く持っていることが理解できる。

一方、平均値が低い項目を具体的にみると、項目15「臨界期仮説や第二言語習得に関する理論(平均:3.41)」、項目13「日本の文化に関する知識(平均:3.50)」、項目14「英会話活

表3：小学校英語活動に関する研修希望事項（N=32）

番号	項目内容	平均	SD
1	小学生向けの英語の歌の指導方法	4.44	0.72
2	チャンツの活用法	4.53	0.67
3	英語のゲームの進め方	4.53	0.67
4	マザーグースあるいはナーサリー・ライムなどの活用法	4.31	0.82
5	フォニックスの指導方法	4.41	0.71
6	実践する際に必要な一般的指導方法や技術	4.38	0.66
7	英会話活動を進めるのに必要なClassroom English	4.69	0.47
8	A L T と話し合うときに活用できる英語表現	4.50	0.67
9	身近で応用の利く一般的な英語表現	4.44	0.67
10	国際理解教育に関する知識	4.19	0.82
11	英語圏の人々の生活や文化に関する知識	4.22	0.71
12	教材として扱われる英語に関する文化的、言語的知識	4.22	0.66
13	日本の文化に関する知識	3.50	0.88
14	「英会話活動」の趣旨やねらいについての体系的知識	3.88	0.75
15	臨界期仮説や第二言語習得に関する理論	3.41	1.01
16	カリキュラム開発の方法について	4.06	0.88
17	「英会話活動」の年間指導計画の立て方	4.25	0.76
18	「英会話活動」の活動案の立て方	4.34	0.70
19	授業分析の方法について	3.94	0.91
20	「英会話活動」の評価方法	4.03	0.90
21	教材や教具の作り方	4.47	0.67
22	インターネットの検索などによる情報収集方法	4.06	0.95

動」の趣旨やねらいについての体系的知識（平均：3.88）」、項目19「授業分析の方法について（平均：3.94）」であった。ここから、平均値を考えると必ずしも希望が低いということではないが、第二言語習得や授業分析の方法等のように理論的な内容や日本文化に関する知識といった小学校英語活動を実践していく際に直接必要ではないと考えられがちな内容に対しては相対的に低めの意識がみられることがわかる。

4.3.2 χ^2 検定結果

次に、小学校「英会話活動」に関する研修希望についての各項目に対して、さらに細かく検討するため χ^2 検定を行った。その際、対象者の立場をより明確にするため、5段階尺度形式の「1：全くそう思わない」「2：どちらかというと思わない」を反対、「3：どちらでもない」を中立、「4：どちらかというと思う」「5：全くそう思う」を賛成とし、3段階にまとめて再集計した上で χ^2 検定を行った。その結果は表4に示すとおりである。

表4から、22項目全項目において有意差・有意傾向がみられた。そこで、「賛成」「中立」「反対」の3者間に対してライアンの名義水準による多重比較を実施した。結果は表4のとおり、賛成が反対や中立より多い項目が20項目であった。一方、それ以外の2項目をみると1項目が「賛成と中立には差がないが、両者とも反対よりは多い」というものと、「賛成、反対、中立の間に差がみられなかった」という1項目であった。

表4：小学校英語活動に関する研修希望事項 (N=32)

番号	項目内容	平均	集計結果			χ^2 検定結果		多重比較(ライオンの名義水準, $p < .05$)
			賛成	中立	反対	χ^2 (2)	p	
1	小学生向けの英語の歌の指導方法	4.44	30	1	1	52.56	**	賛成>中立≒反対
2	チャンツの活用法	4.53	31	0	1	58.18	**	賛成>中立≒反対
3	英語のゲームの進め方	4.53	31	0	1	58.18	**	賛成>中立≒反対
4	マザーグースなどの活用法	4.31	27	4	1	37.93	**	賛成>中立≒反対
5	フォニックスの指導方法	4.41	28	4	0	43.00	**	賛成>中立≒反対
6	実践する際に必要な一般的な指導方法や技術	4.38	29	3	0	47.68	**	賛成>中立≒反対
7	必要なClassroom English	4.69	32	0	0	64.00	**	賛成>中立≒反対
8	A L Tと話し合うときに活用できる英語表現	4.50	29	3	0	47.68	**	賛成>中立≒反対
9	身近で応用の利く一般的な英語表現	4.44	29	3	0	47.68	**	賛成>中立≒反対
10	国際理解教育に関する知識	4.19	26	5	1	33.81	**	賛成>中立≒反対
11	英語圏の人々の生活や文化に関する知識	4.22	27	5	1	38.68	**	賛成>中立≒反対
12	教材の英語に関する文化的、言語的知識	4.22	28	4	0	43.00	**	賛成>中立≒反対
13	日本の文化に関する知識	3.50	14	15	3	8.31	*	賛成≒中立>反対
14	趣旨やねらいについての体系的知識	3.88	23	8	1	23.68	**	賛成>中立≒反対
15	臨界期仮説や第二言語習得に関する理論	3.41	16	10	6	4.75	+	賛成≒中立≒反対
16	カリキュラム開発の方法について	4.06	25	5	2	29.31	**	賛成>中立≒反対
17	「英会話活動」の年間指導計画の立て方	4.25	26	6	0	34.75	**	賛成>中立≒反対
18	「英会話活動」の活動案の立て方	4.34	28	4	0	43.00	**	賛成>中立≒反対
19	授業分析の方法について	3.94	24	5	3	25.18	**	賛成>中立≒反対
20	「英会話活動」の評価方法	4.03	22	9	1	21.06	**	賛成>中立>反対
21	教材や教具の作り方	4.47	31	1	0	58.18	**	賛成>中立≒反対
22	インターネットの検索などの情報収集方法	4.06	26	4	2	33.25	**	賛成>中立≒反対

+.10<p<.05 *p<.05 **p<.01

具体的にみると、賛成および中立が反対より多かった研修希望内容であるが、「日本の文化に関する知識」であった。さらに、賛成か反対か中立かという立場の違いに差がなかった研修希望内容は「臨界期仮説や第二言語習得に関する理論」であった。どちらの内容も、ふだん小学校英語活動を実践するにあたっては、一見すると、直接的に必要なとされないと考えられがちな内容である。そこで、以上のような結果になったものと推察される。

4.3.3 分散分析結果

さらに、以上の22項目の研修希望内容間について、本調査の対象者の意識差があるかどうかを明らかにするために分散分析を行った。その結果、F値は8.48であり、1%レベルで有意な結果であった ($F(20,651)=8.48, p<.01$)。さらにLSD法による多重比較を行ったが、項目13「日本の文化に関する知識」、項目15「臨界期仮説や第二言語習得に関する理論」の2つの項目が他の20の項目より、研修希望への意識において有意に低いことがわかった ($MSe=0.39, 5\%$ 水準)。同結果は、「4.3.2」の分析結果を裏づける結果となった。

以上から考えると、「4.3.1」で検討したとおり平均値をみると必ずしも上記2項目の内容に

ついて研修希望意識が低いわけではないが、本研究の対象者である小学校英語活動指導者講座参加者は、研修の希望内容として、「日本の文化に関する知識や小学校英語の理論的なもの」については、他の20の研修内容に比べるとその必要性がどちらかというといと低いと捉えていることが明らかとなった。なお、同2項目のうち前者については、現在の小学校英語活動が「国際理解教育の一環であること」からは是非研修内容として扱いたい内容とされている。また、後者の内容についても、「小学校英語活動の研修がHow toに流れ過ぎている」「英語活動が遊びなのか学びなのか区別できない」などの批判に応じていくためにも是非研修内容として加えていきたい内容である。したがって、同2項目に関する内容を研修内容として取り上げる際にはその必要性について啓蒙する等の工夫が必要であると考えられる。

5. 今後の課題

今回の調査は、対象者が32名であり、十分な数とはいえないので、さらに人数を増やして調査を行う必要がある。また本研究の対象者は、小学校英語活動指導者講座参加者であり、小学校英語活動に対して肯定的かつ積極的であると考えられる。そこで、今後一般の小学校教員を対象に、特に研修希望内容について調査をしていくことが重要であると思われる。現在、初任者研修、5年経験者研修、10年経験者研修も都道府県の教育センターを中心に実施されていることから、教員経験数の違いによって、研修希望内容に差があるのかどうか検討していきたい、と考えている。

引用・参考文献

- 荒川ゆり他 (1999) 「公立小学校における英語教育はどのように進めていけばよいか—小学校 (文部省指定・研究開発学校) と同学区内の中学校教員の意識調査—」『JASTEC研究紀要』18, pp.71-79.
- 伊藤嘉一 (2002) 小学校英語学習 レディゴー ギョウセイ.
- 片桐多恵子他 (1994) 『『小学校への英語教育導入について』の公立小学校教員の意識調査—愛知県・静岡県・岐阜県の場合—』『JASTEC研究紀要』13, pp.109-119.
- 金森 強 (編著) (2003) 小学校の英語教育 指導者に求められる理論と実践 教育出版
- 久埜百合 (2002) こんなときどうする? こども英語救急箱 ピアソン・エデュケーション
- 樋口忠彦他 (JASTEC関西支部調査研究プロジェクト・チーム) (2002) 「小学校英語活動に対する中・高英語教員の態度及び意識に関する研究」『JASTEC研究紀要』21, .19-43.
- 北條礼子・渡邊由紀子・熊井信弘 (2002a) 「公立小学校への英語導入に関する意識調査」『上越教育大学研究紀要』21, 2, pp.513-526.
- _____・松崎邦守 (2003) 「公立小学校での『英会話』活動に関する意識調査」『小学校英語教育学会紀要』3, 39-45.
- _____・若山真幸・赤松信彦 (2002b) 「公立小学校への『英語導入に関する文献研究の概観』『上越英語研究』3, 3-17.
- 松川禮子 (編著) (2003) 小学校英語活動を創る 高陵社書店
- 松崎邦守・北條礼子 (2002) 「公立小学校における英語科導入に関する動向」『上越英語研究』3, 47-68.
- _____・_____ (2003) 「公立小学校における『英会話活動』に関する意識調査—公立小学校現職教員に対するアンケート調査をととして—」『JASTEC研究紀要』22, 101-124.
- 横山 東・横山正幸 (1993) 「幼児の英語教育に対する母親の意識と体験」『JASTEC研究紀要』12,

12-26.

渡邊時夫（2001）「指導者に必要な資質と研修」 小学校の英語教育－地球市民育成のために－（樋口・行廣編）KTC中央出版 174-195.

A Survey of English Activities at Public Elementary Schools Based on a Questionnaire for Participants in a Lecture for Leaders of English Activities at Elementary Schools

HOJO Reiko* · MATSUZAKI Kunimori**

ABSTRACT

This study investigates how elementary school teachers think about problems with English activities at public elementary schools and in what contents of in-service training courses they hope to attend. Questionnaires with a 5-point scale form were given to 32 elementary school teachers who attended the lecture for leaders of English activities at elementary schools in June of 2003. The questionnaire consisted of 41 items. 19 out of 41 items asked about the problems with English activities at elementary schools, while 22 items asked about what contents of future in-service training the teachers hoped to learn about. The results showed that: ① As for the problems with English activities at public elementary schools, the teachers felt they had neither enough time nor knowledge to create both the curricula and instructional materials for English activities, and ② The teachers hope to attend in-service training where they can learn how to effectively utilize chants and games, as well as learn classroom English which is necessary to practice English activities, especially with ALTs.

* Division of Learning Support

** Takayanagi Junior High School, Chiba